



令和7年度 苫小牧市中学生広島派遣事業

体験感想文集

平和の翼

苫小牧市総合政策部政策推進課

目次

◆	中学生広島派遣事業を終えて 政策推進課 成田 智哉	▶	1
◆	明倫中学校 3年 平田 朔也	▶	2
◆	啓北中学校 3年 長浜 璃々	▶	4
◆	光洋中学校 3年 片平 来実	▶	6
◆	緑陵中学校 3年 若林 瑞穂	▶	8
◆	凌雲中学校 3年 三小田 暖	▶	10
◆	事業の様子	▶	12
◆	苫小牧市非核平和都市条例条文	▶	18

令和7年度 中学生広島派遣事業を終えて



苫小牧市総合政策部政策推進課
主任主事 成田 智哉

本事業は、次代を担う子どもたちが被爆地である広島を訪問して戦争の悲惨さや平和の大切さを学び、現地で体験したことを市民に伝えることによって平和の尊さについて考える機会を創出することを目的に実施しています。本研修は平成7年から行われており、実施回数は29回目を迎え、派遣された人数は今回の派遣者を含め150名となりました。

今年度は、7月11日に事前学習、7月18日に市長表敬を終えて、7月28日から30日までの3日間で派遣研修を行いました。

派遣者はこの3日間で、実際に被爆された豊永恵三郎さんから直接お話を伺ったほか、平和記念資料館の見学、平和の子の像への千羽鶴の奉納、本川小学校平和資料館の慰霊碑への献花及び施設見学などを行いました。

8月15日の平和記念式典では派遣者一同で作り上げた「平和の誓い」を発表したほか、派遣者を代表して片平来実さんが広島研修の体験感想文を発表しました。また、各学校の2学期始業式などでは、派遣者がそれぞれ他の生徒たちへ今回の学びを伝えました。

本事業を通して、派遣された5名の中学生には、戦争の悲惨さや原爆の実相など学んだことを周囲へ語り継ぎ、核兵器のない恒久平和の実現に貢献してくれることを期待しています。

最後に、今回の広島派遣事業を実施するに当たり、御理解と御協力をいただいた皆さまにこの場をお借りして感謝申し上げます。





私たちは、苫小牧市中学生広島派遣事業として、3日間、広島に滞在し、この賑やかで、とても美しい広島に突如として落とされた原子爆弾について学んできました。1945年8月6日午前8時15分、夜が明けて、人々は準備をして、学校に行ったり、仕事に行ったりして、普段と変わらない新しい1日が始まろうとしている中、世界で初めて落とされてしまった原子爆弾は、空中で爆発し、目が眩む程の光、大きな音とともに、人々、動物の尊い命を一瞬にして奪いました。建物は吹き飛ばされ、あらゆる物が高熱で焼かれ、皮膚はただれて、あたりには灰だらけ。誰もが口を揃えて「地獄」と言える状態になってしまいました。



今回の研修で、実際にこの惨状を目の当たりにした豊永恵三郎さんのお話を聞きました。豊永さんは、市外の病院にいるときに、原子爆弾が落とされ、大きなきのこ雲が立ち上がっているのを見ました。豊永さんは、真っ先に家族のことが心配になり、戻ろうとしましたが、戻ることが出来たのは次の日からでした。家族を探し続けて、見つけることが出来たのは2日後の8月9日でした。家族は生きており、母は皮膚が焼けただれ、誰かわからない程の状態でしたが、会うことが出来たとお話をしていました。お話の最後に私は「アメリカ人に対して何か思うことはありますか」と質問をしました。豊永さんは「アメリカの政府が原子爆弾を落としたことを正しいとすることが許せない」と言っていました。お話を聞いて、当時の被害だけでなく思想も恐ろしいなと思いました。

被害の大きさは、平和記念資料館や本川小学校で深く知りました。展示されていたものの中には、実際に爆撃にあい、ボロボロになった服、割れた皿、溶けて曲がった鉄骨、当時の写真や絵がありました。特に写真や絵には、あまりにも酷い状況が示されているものもあり、目を向けられない程のものもありました。しかし、それらを真

剣に見ている外国人の割合が多いと感じました。原子爆弾がもたらした被害を知ろうとしているのは日本人だけではなく、遠くの国から来た人も知ろうとしていると改めて実感しました。原子爆弾で亡くなった人は約14万人と言われていますが、それは爆撃にあって亡くなった人だけではなく、放射線が原因で病気になってしまい亡くなった人、食べ物、水がなくて餓死してしまった人など、たくさんいます。それは今世界で起こっている戦争でも同じです。戦場で銃に打たれ、亡くなった人、爆弾で亡くなった人、治療を受けながら病院で亡くなった人もいます。例えば、生まれた場所や思想が違っているとしても、「平和になりたい、平和に過ごしたい」という考えはみな共通なのではと思います。私は、今回学んだこと、そして平和についての考えを「伝える」ことを大事にしていきたいです。





1945年8月6日午前8時15分、広島で起こったあの出来事を私たちは、決して忘れてはいけません。今からちょうど80年前、そこで苦しんだ人、辛い思いをした人、苦しみ続けた人がいたのです。

私は実際に広島に行って、改めて平和の大切さと原子爆弾の恐ろしさを考えさせられました。平和記念資料館では爆風により破壊されボロボロになった建物、焼け野原となった広島、全身火傷して真っ黒になった人、皮膚がただれて肉がむき出しになっている人、悲惨で残酷な被爆者たちの写真がありました。その中でも「魂の叫び」という被爆者や遺族の苦しみを伝えるコーナーが1番印象に残りました。そこには「痛いよー、苦しいよー」「死にたくない、」「助けてあげられなくてごめん」といった、亡くなった人、残された人、一人ひとりに心の底からの叫びがあったと書かれています。想像してもしきれないくらい辛い思いをした人がいて、残された人も後遺症で苦しんだり、大切な人を亡くし、ひとりぼっちになり悲しんだりして、自分だったらと考えると心が締め付けられました。

語り部の豊永さんのお話では、被爆者ならではのお話を聞くことができました。全身火傷した人は誰かわからないほど真っ黒で、その中から家族、知り合いを見つけるのは難しく、家族と再会できた私は幸運であると話していました。永遠に家族と会えなくなった人がいる、探し続けている人がいることの事実が胸が苦しくなりました。

「たった一発の原子爆弾が、数え切れないほどの笑顔を奪った」この事実があるにもかかわらず、核兵器を保有する国は増え続け、戦争も増えていく一方です。お腹いっぱいご飯を食べて、くだらないことで笑う、そんな何気ない日常を世界中の人が当たり前前に過ごせることが「平和」だと思います。



「平和」を守り続けるために私たちができることを考えたときに私は思いました。私たちにできる事は本当にあるのかと。しかし、戦争を止めることができなくても、自分の周りを平和にすること、考えを改めることは私たちにもできるのではないのでしょうか。

相手を思いやり尊重することで、身近な差別やいじめは減っていきます。戦争、原子爆弾のことを知ることで、それはとても恐ろしいものだと思わずにいられます。そしてそれを伝えることで次の世代にも永遠に語り継ぐことができるのです。

こうした小さいことの積み重ねが、世界を「平和」にしていくのではないのでしょうか。世界中の人が笑って何気ない毎日を当たり前で過ごせる日が来ることを願っています。





私は平和をただ待っていた。朝が来れば太陽が昇るように、祈れば奇跡が降るように。

けどそうじゃなかった。「平和は待つものではなく、つくるもの」そう語った被爆体験者の瞳は曇りなき眼だった。誰のせいにもせず、ただ真っ直ぐ前だけを見ていた。

踏み込んだその街、広島。見慣れない景色、聞きなれない蝉の声。だが確かにそこには、生きた過去があった。原爆資料館で見たのは文字でも映像でもなく叫びだった。赤く焼け爛れた肌、3と8を指して止まった時計、泣くことすら許されなかった遺影。熱くなった喉には言葉が詰まった。爛れた手で這いつくばい、足で必死に歩いた人がいた。

苦しかったろう。辛かったろう。それでも生きようと息を止めなかった。私はその痛みを知らない。ただ想像して、胸を痛めることしかできない。でも思ってしまう。「それでも生きたかったのだ」と。

被爆体験者が語られたのは、地獄のような日常だった。一瞬で消えた日々、家族、夢、すべて。けれど体験者は、憎しみを語らなかった。「もう二度とこんな思いを誰にもさせたくない」その思い一つで、語り続けている。まさに真実一路。

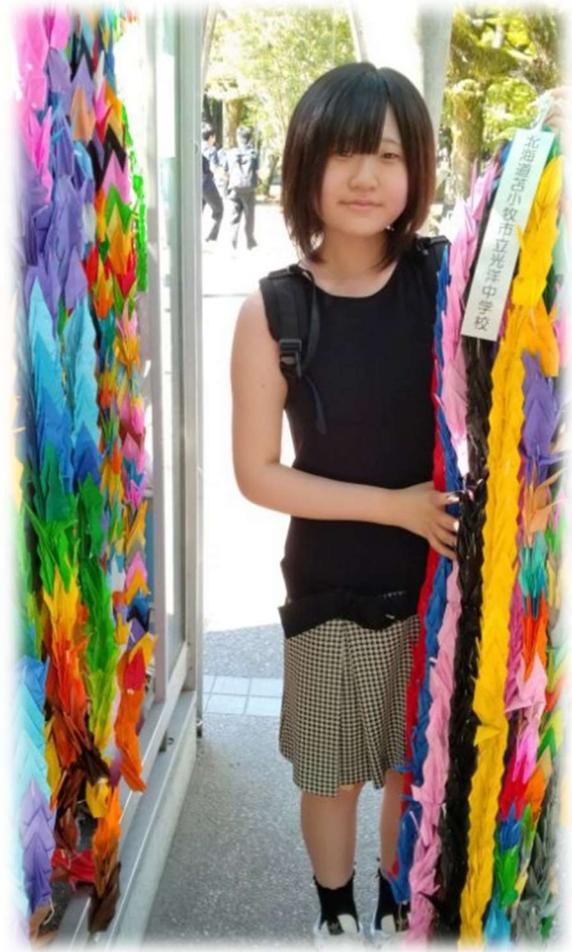
夕暮れ時、私は広島である光景を目にした。母と幼い子供が手を繋ぎ笑いながら歩く姿。ゆっくりと雲が流れ、赤く染まる空。あの日の空の色ではないただ優しい色。心が溶けるようだった。これが「幸せ」だと思った。そして、こんな風景を守ることが平和なんだと思った。

鵜呑みにしてはいけない歴史がある。無駄にしてはいけない命がある。それを忘れた瞬間、過ちは繰り返される。過去は過ぎ去るものではなく、現在を照らす灯なのだ。



私がみた広島は祈りの街だった。悲しみを知り、それでも微笑みを捨てなかった街。その強さに私は憧れた。そして今、私は待つ者からつくる者へと歩みだす。一步一步、小さくても確かに。

平和は願いじゃない。覚悟だ。失って知る前に守る力を持ちたい。この物語が誰かの明日を照らすように。私はあの日を忘れない。





私たちは、苫小牧市中学生派遣事業に派遣者として参加し、被爆地「広島」を訪れました。私たちが訪れた広島はとても暑く、高い建物がたくさんあり、昔このまちに原爆が落とされたとは想像できないほど発展していました。

1945年8月6日午前8時15分。広島に原爆が投下され、約14万人もの人々の命が奪われました。被爆地付近にある時計は8時15分で止まり、広島駅が被爆したため、広島へ行く電車も止まり、一瞬にして広島のは時は止まりました。

私たちは、今回の研修で最初に平和記念資料館を見学しました。平和記念資料館には多くの被爆者の遺品や言葉、写真など原爆に関するたくさんの資料が残されていましたが、どれも私たちの想像を超える恐ろしさを実感させるものばかりでした。また、たくさんの外国人の方々も訪れていて、翻訳機などを使い、原爆の資料を見ていて、広島から原爆の危険性や平和の大切さが外国にも伝えられていることを感じました。

私たちは資料館を見た後、被爆者であり、語り部の豊永恵三郎さんの被爆体験講話を聞きました。豊永さんによると、豊永さんは原爆が落とされた8月6日の朝、中耳炎で学校を休み、市外の病院へ向かっていました。すると、原子爆弾が投下され、広島の方からとても大きな音がしました。町の方を見るとキノコ雲と呼ばれる雲が見え、豊永さんは家族が心配で家に帰ろうと何時間も列車を待ち続けました。

しかし、どれだけ待っても広島へ行く列車は来ず、豊永さんは祖父母の家に行き、祖父母と共に家族を探し始めました。探しに行った際、町は焼けていて、頭髪の焼け



ちぢれた、皮膚がボロボロの、もはや誰かさえわからない被爆者であふれかえっていました。数日後、豊永さんは無事家族との再会を果たしたそうです。この話を聞き、私はとても現実とは思えない原爆の被害の実態を知り、想像よりも悲惨な現実を目の当たりにしました。

2日目に入り、私たちは原爆の子の像に各校で作った千羽鶴を奉納しました。周りを見ると、個性豊かなたくさんの千羽鶴があり、たくさんの人々が広島に訪れ、平和を願っていることを実際に見て感じました。その後、私たちは本川小学校に向かいました。本川小学校は被爆地に最も近い



小学校で、被爆時は破壊され、多くの命が奪われたものの、鉄筋コンクリートでできていたため倒壊を免れた建物です。私たちはここで、ガイドの岩田さんの話を聞きました。岩田さんによると、ここは被爆時の臨時救護所として使われ、たくさんの人々が来たそうです。しかし、医療設備は整っていなかったため、ここで亡くなった人もたくさんいました。亡くなった人々はグラウンドに穴を掘り、埋葬されましたが、火葬はしていないので、掘り返せば亡くなった被爆者が見つかるかもしれないそうです。

私は、私たちが普段遊んだり、体育の授業などをしたりする身近な「グラウンド」で人が見つかる可能性があると感じ、とても恐怖を感じました。

最初、今の広島のみちは発展していたと感じていましたが、体験後、このみちはたくさんの人々の願いや希望、被爆者達の努力の結晶だと気づき、広島のみちの見え方が大きく変わりました。今、世界では、各地で戦争や紛争が起こり、平和が脅かされている人々がたくさんいます。私は今回学んだ体験をいかし、少しでも平和な世界の未来を作るためにこの体験を発信し、全ての人々が平和で幸せな世界を生きられることを願っています。



私は、2025 年度広島派遣事業の派遣者として広島に派遣され、「平和の尊さ」について改めて考えてきました。

私は幼いころから、原爆ドームに行ってみたいと考えていました。今回の事業では、当時の日本の様子や、戦争がどんなに残酷なものなのかを実際に自分の目で確かめ、事実を受け止めたいという心持ちで参加させていただきました。

1945 年 8 月 6 日。今から 80 年前、当時日本で暮らしていた人々の日常が一瞬にして消え去った日。80 年後の 2025 年に、私は実際に原爆ドームを目にし、とても衝撃を受けました。遠目から見ても原爆ドームの存在感はとても強く、不思議で、神秘的なオーラを放っているように見えました。

爆撃を受ける前は、「原爆ドーム」ではなく「広島県物産陳列館」であった建造物。あそこまで強い爆撃を受けたのにも関わらず、倒壊せずにほとんど当時の状態のままその場に立ち伏しているのを見て、建造物に対して「よく頑張ったね、偉いね。」と、思わず慰めるような言葉を頭の中でかけてしまいました。

その後、平和祈念資料館の見学もしました。展示物は、被爆者の遺品や火傷でただれた皮膚の写真、必死に川の中に飛び込む人々の写真など、どれも悲惨なものばかりでした。中でも印象に残っているのは、爆心地から 600m 離れた建物疎開の作業現場で亡くなった「折免滋さん」の遺品です。骨になった折免滋さんの遺体を、母親が見つけた時、遺体の下から見つかった弁当箱が展示されていました。中身は真っ黒くなっていました。「滋さんはお弁当を楽しみに出かけましたが、それを食べることはできませんでした。」という文章を見て、胸が苦しくなりました。



平和祈念資料館を見学した後すぐに、被爆者の豊永恵三郎さんの講話を聴きました。ここでは、日本が初めてアメリカのオバマ大統領を招いた時の話が印象に残りました。「オバマ大統領は挨拶の時に、原爆のことをこう言いました。『ある日突然、訳も分からず光が降ってきて…』と。話の中に一言も謝罪はなかった。それがとても辛かった。せめて一言ごめんなさいと謝ってほしかった。」と豊永さんは話しました。怒りと悲しみ、呆れ、やるせない気持ち。色々な感情を心の奥底で抱えながら語る豊永さんの表情に、心臓がギュッと締め付けられました。



今回の事業でたくさんの方の経験しました。被爆された人々の写真を見て核兵器の恐ろしさが身に染みたり、現在減りつつある語り手の方の貴重なお話を聞いて色々な気づきがありました。

戦争について関心を持ち、学ぶことは、「日本人」として、とても大切なことだと思っていました。ですが、平和祈念資料館に訪れたたくさんの外国人観光客の方を見てその考えは変わりました。戦争について学ぶことは、私たち日本人に限らず、「世界中の人々」にとっても大事と言えるということが分かりました。

私は「平和の尊さ」とは、今平和に生きていられることに尊さを感じるのではなく、悲惨で残酷な過去さえも受け入れ、人々が積み重ねてきた歴史そのものを愛すること、そして、前を向いて生きていくことだと思いました。

事業の様子

令和7年7月11日（金） オリエンテーション・事前学習

研修当日の役割分担やスケジュール、注意事項を確認し本番への準備を行いました。その後、原子爆弾投下後の広島を鑑賞し、研修本番に向けた事前学習を行いました。



令和7年7月18日（金） 市長表敬

オリエンテーション・事前学習を終え、広島派遣者による市長表敬を行いました。

それぞれ自己紹介を行い、研修に対する意気込みや研修に参加した動機を語り、金澤市長から激励の言葉をいただきました。

各所に設置された折り鶴コーナーにより、市民の皆さまからたくさんのお折り鶴をいただきました。御協力ありがとうございました。

《設置された折り鶴コーナー》

* 苫小牧市遺族会による折り鶴コーナー

（5月21日～23日・市民活動センター）

* 平和の折り鶴コーナー

（6月2日～30日・市役所、沼ノ端・のぞみコミュニティセンター）



《1日目》7月28日（月）

- *語り部・豊永恵三郎さんによる被爆体験講話を受講
- *広島平和記念資料館見学

《2日目》7月29日（火）

- *広島平和記念公園内「原爆の子の像」へ千羽鶴を奉納
- *本川小学校平和資料館慰霊碑へ献花
ガイドの岩田美穂さんによる解説と見学
- *世界遺産「厳島神社」見学



《3日目》7月30日（水）

- *帰省

豊永恵三郎さんによる被爆体験講話、広島平和記念資料館見学

1945年（昭和20年）8月6日午前8時15分。広島に世界で初めて原子爆弾が投下され、その年の12月末までに約14万人の人々が亡くなりました。

残留放射線によって被爆した語り部の豊永恵三郎さんから、被爆体験についてお話をしていただきました。



●被爆体験講話の様子

その後、平和記念資料館へ向かい、当時の悲惨な状況を物語る資料の見学を行いました。黒こげになった弁当箱、当時の情景を描いた絵、高熱で溶けたガラス瓶など、被爆した方の遺品がそれを巡るエピソードとともに展示されており、被爆の実相に触れてきました。

平和記念公園、本川小学校平和資料館

【平和記念公園】

派遣者が在籍する各中学校の生徒が作成した千羽鶴と、苫小牧市民の皆さまから寄せられた折り鶴で作成した千羽鶴を「原爆の子の像」へ捧げました。



●奉納した千羽鶴

【本川小学校】

本川小学校は爆心地から350m離れたところにあり、原爆によって、児童と教職員約400人の命が一瞬にして奪われました。

この平和資料館は、昭和3年に広島で初めて建てられた鉄筋3階建ての校舎の一部で、被害を受けた状態をそのまま残し、被爆の「証」として保存されています。展示されている写真や遺物には、多くの人々の悲しみや願いが込められています。



●本川小学校資料館

ガイドの岩田美穂さんから、岩田さんの母親が体験したお話や当時から現在までの小学校の様子をお話いただきました。



●資料館前の慰霊碑



●岩田さんの説明を聞く様子

令和7年8月15日（金） 苫小牧市平和祈念式典

終戦の日に行われた平和祈念式典では、片平さんが派遣者を代表して広島派遣の体験感想文を発表し、派遣者全員で平和の誓いを朗読しました。



● 平和記念式典に出席する派遣者



● 市長と記念撮影

『平和の誓い』

戦争は許されることだと思いますか。

戦争は、緑豊かで美しいまち、笑顔溢れる商店街、元気な子供たちの声を一瞬にして奪ってしまいます。

今から80年前の1945年8月6日、広島に原子爆弾が投下され、その瞬間に、人々の笑顔は奪われました。その苦しさは、現代を生きる私達には計り知れません。

今、私達は飲みたい時に水が飲めて、お腹が空いたらご飯を食べられます。核兵器を恐れることなく生活しています。これは当たり前のことではありません。

世界では、今も戦争が行われており、家族を失ったり、安心して眠りにつくことができないなど、苦しい思いをしている人々がたくさんいます。

私達は、この世界中から苦しい思いをする人がいなくなることを祈っています。苫小牧市中学生広島派遣事業の派遣者として、戦争や核兵器の恐ろしさを理解して次世代に伝えていきます。

平和の2つの誓いをここに掲げます。

全ての生命を尊び、他者を思いやる気持ちを持ちます。そして、世界中の人々が笑顔で暮らせるように平和の光を灯し続けることを誓います。

事後研修～各中学校での体験発表～



●明倫中学校 平田 朔也 さん



●啓北中学校 長浜 璃々 さん



●光洋中学校 片平 来実 さん



●緑陵中学校 若林 瑞穂 さん



●凌雲中学校 三小田 暖 さん

広島派遣事業の事後研修として各中学校で派遣者による体験発表を行いました。実際に被爆地に行き、感じたことや見たものを他の生徒達に伝え、平和について考えてもらう時間を設けました。この事後研修による取組を通じて、一人でも多くの市民の方々に平和の想いが広がることを願っています。

協力していただいた各中学校の皆さまありがとうございました。



●戦没者慰霊碑

世界最初の原子爆弾によって壊滅した広島市を平和都市として再建することを念願して設立したものです。「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから」と原爆犠牲者の冥福を祈り、戦争という過ちを再び繰り返さないことを誓う言葉が刻まれています。



●原爆の子の像

2歳の時に被爆した佐々木禎子さんが、10年後に白血病で亡くなったことをきっかけに、同級生たちが慰霊碑をつくろうと呼びかけ、昭和33年に完成しました。

この「原爆の子の像」の周辺には、折り鶴を捧げていただけるよう折り鶴ブースが設置されています。



●相生橋(あいおいばし)

この橋を目標に原爆投下したともいわれており、そのすさまじい衝撃波により、橋桁は変形し、橋桁の一部しか残りませんでした。

その後、復旧工事をして使用されていましたが、昭和58年に新しく架け替えられました。

現在、橋詰めには被爆の痕跡を残す親柱が保存されています。

苫小牧市非核平和都市条例

わたしたち苫小牧市民は、安全で健やかに心ゆたかに生きられるように、平和を愛するすべての国の人々と共に、日本国憲法の基本理念である恒久平和の実現に努めるとともに、国是である非核三原則の趣旨を踏まえ核兵器のない平和の実現に努力していくことを決意し、この条例を制定する。

(目 的)

第1条 この条例は、本市の平和行政に関する基本的事項を定め、市民が安全で健やかに心ゆたかに生活できる環境を確保し、もって市民生活の向上に資することを目的とする。

(恒久平和の意義等の普及)

第2条 市は、日本国憲法に規定する恒久平和の意義及び国是である非核三原則の趣旨について、広く市民に普及するように努めるものとする。

(平和に関する交流の推進)

第3条 市は、他の都市との平和に関する交流を推進するように努めるものとする。

(その他平和に関する事業の推進)

第4条 市は、前2条に定めるもののほか、平和の推進に資すると認める事業を行うように努めるものとする。

(平和の維持に係る協議等)

第5条 市長は、本市において、国是である非核三原則の趣旨が損なわれるおそれがあると認める事由が生じた場合は、関係機関に対し協議を求めるとともに、必要と認めるときは、適切な措置を講じるよう要請するものとする。

(核兵器の実験等に対する反対の表明)

第6条 市長は、核兵器の実験等が行われた場合は、関係機関に対し、当該実験等に対する反対の旨の意見を表明するものとする。

(委 任)

第7条 この条例の施行に関し必要な事項は、市長が定める。

附 則

この条例は、公布の日から施行する。

(平成14年4月1日公布)



【 発 行 】

苫小牧市総合政策部政策推進課

所在地：〒053-8722 苫小牧市旭町4丁目5番6号

電 話：0144-32-6039 FAX：0144-34-7110

E-mail：seisaku@city.tomakomai.hokkaido.jp

(令和7年12月12日)